編集後記

人間科学論集社会学編も第７号を発刊できる運びになりました。原稿をお寄せいただきましたみなさまにお礼を申し上げます。

今年度は、文学部開設50周年の年にあたる今年度、専修大学の社会学教育についてみてみました。専修大学の前身、専修学校時代から社会学教育は行われており、1885（明治18）年発行『専修学校一覧』によると、経済科、法律科共に第３学年前・後期の１年間を通して「世態学」という名称で社会学が講じられています。専修大学創設者の一人である相馬永胤、田尻稲次郎は、エール大学でW.G.サムナー（米国社会学会二代目会長、主著『フォークウェイズ』）から経済学や社会学を学んでいました。こうしたことも社会学教育が専修大学において早くから行われていたことに繋がったのではないかと推察しています。専修大学創設から明治時代の大半の時期に社会学教育は行われ、大正期の11年以降大学令により専修大学が認可されると経済学部経済学科の第一学年必修科目の一つとして社会学が置かれています。昭和戦前期も社会学は経済学部、法学部共に置かれていました。

敗戦後、専修大学の再建が図られ、今村力三郎総長のもと教授陣容の立て直しが図られ1946（昭和21）年には、大河内一男が経済学部長に就任（東京大学教授と兼任）、永田清、五島茂とともに清水幾太郎も教授となったと『専修大学百年史』には記述されていますが、清水幾太郎は実際には赴任しなかったのではないかとのことです（要調査）。

1948（昭和23）年、専修大学は、経済学部（経済学科、社会学科）、法学部（法律学科、政治学科）、商学部（商業学科、経理学科）の３学部で構成する新制大学移行の申請書を文部省に提出しました。しかし、申請通りとはいかず、商経学部（商業学科、経済学科）、法学部（法律学科）の二学部で翌49年２月に認可されました。こうして、社会学科の構想は消え、一般教養科目の中の社会科学系科目として置かれることになりました。

このように専修大学の歴史の中で、早くから社会学教育は行なわれており、新制大学の移行にあたっては社会学科新設も計画されましたが、社会学の専門教育が行われるようになるには、1966年文学部人文学科の開設後、翌年、社会文化コースが開設されるまで待たなければならなかったのです。

人間科学部社会学科の前身は、文学部人文学科社会学専攻にあり、文学部開設２年目の’67年にさかのぼれば文学部人文学科社会文化コースに至ります。当時は、社会文化コースの専任教員は、経済学部から移籍されてきた芥川集一先生〔理論社会学〕おひとりでした。文学部開設３年目にして西川善介先生〔村落社会学〕が就任され、社会文化コースの専任教員は２人になります。

人文学科には哲学、人文、史学、地理学、社会文化、心理学の各コースが設けられ、学生たちは２年次から各コースに分かれて学ぶというシステムでした。学生たちは、自由にコースを選択できました。たった二人の専任教員しかいない社会文化コースでしたが、本コースを希望する学生は多数あり、とてもお二人でまかないきれませんでした。非常勤講師の映画評論家瓜生忠夫先生、法政大学教員の石川淳志先生のお二人にゼミも担当していただくという専任並みのお手伝いをいただき何とか運営できました。

その後、文学部発足10年目の1976年に柴田弘捷先生〔産業労働社会学〕、翌年77年に宇都榮子〔社会福祉〕が就任し、専任４人の体制になりました。４人で一学年100名前後の学生の教育を担っていかなければならないという時期も長く続きました。現在は一学年140名程度の学生に14名の専任教員ですので、創設当時のことを思うと芥川先生、西川先生の御尽力のうえに今があるのだなあとの思いを抱いています。

1985年、人文学科の第１回目の大改革が行われ、５コースとなり社会文化は「社会学コース」に名称変更し、社会調査実習の必修化（２年次）、２、３、４年次のゼミナールと卒業論文を必修とし、実証研究を重視した社会学教育を行うことを明確にしました。その後、88年に米地實先生〔西川先生後任、村落社会学〕、広田康生先生〔都市社会学、増員〕、’91年、嶋根克己先生〔現代文化論、社会意識論、増員〕が就任され、専任教員は６人体制となりました。88年には芥川先生悲願の専修大学社会学会が設立され、学会機関誌『専修社会学』が創刊されました（89.03）。この年には大学院文学研究科社会学専攻の開設準備中でしたが、誰よりも大学院開設を切望されていた芥川集一先生は、開設を目にされることなく、この年の９月にご逝去されました。翌92年大学院が発足、北川隆吉先生〔理論社会学、増員〕、皆川勇一先生〔環境社会学、増員〕が就任され、93年児島和人先生〔コミュニケーション論、増員〕が就任されました（この年、専任８人体制）。大学院博士後期課程の発足の年94年には玉水俊哲先生〔生活構造論、増員〕が就任され９人体制となりました。98年には北川・皆川の両先生が定年退職、それぞれ後任に川上周三〔理論社会学〕、

大矢根淳〔災害社会学〕の両先生が就任されました。

2001年、文学部の改編の中で、人文学科は社会学を含む４コースの専攻科と心理学の学科化という２度目の改革を行い、社会学専攻は「入試単位」となり、１年次から専攻所属学生を入学試験で選抜することとなりました（定員60名、2004年には定員90名）。

2003年、玉水先生の後任として樋口博美先生〔生活論〕が、2004年、児島先生、米地先生の後任として秋吉美都先生〔コミュニケーション論〕、今野裕昭先生〔地域社会学〕が赴任、2006年、馬場純子先生〔高齢者福祉論、増員〕が赴任、10人体制となりました。

2004年、学部に社会調査士資格取得のカリキュラムが組まれ、翌年大学院に専門社会調査士資格取得のカリキュラムが組まれ。専攻定員が90名となりました。

2010年には文学部の再編が行われ、４学科６専攻から日本語、日本文学文化、英語英米文学、哲学、歴史学、環境地理学の６学科に新設の人文ジャーナリズム学科を加えて７学科となり、社会学専攻は社会学科となり、心理学科と共に新しく人間科学部を創設することになりました。そして、新設の社会学科には、これまでの専任教員に加えて、金井雅之先生〔数理社会学〕、後藤吉彦先生〔現代文化論〕、永野由紀子先生〔家族社会学〕、藤原法子先生〔都市社会学〕の４名の先生方をお迎えすることになり、専任14名体制となりました。そして新設の社会学研究教員室には雇員お二人を迎え、新設の社会学調査実習室３室を加え、社会調査実習室は６室となり、ほかに統合情報資料室、社会学科専用のパソコン室などが設けられ、施設設備の充実も図られました。

そして学科機関誌も、『専修社会学』から『専修人間科学論集　社会学編』となり７号目刊行に至ったわけです。いささか長い編集後記となりましたが、こうした歴史の上に学科機関誌も編集されているということを読者諸氏に知っていただければ幸甚です。なお、本編集後記記載にあたっては、柴田弘捷先生が『専修社会学』第19号、第24号に記述された「社会学専攻40年の軌跡」、「専修大学・社会学教育の発展」に負っていることをお断りいたします。

（社会学篇編集主幹　宇都榮子）